「信条教育」について考える―イスラームの宗教教育―②

おやさと研究所講師
澤井　真 *Makoto Sawai*

「宗教教育」と天理教の「信条教育」

「教育の基本は家庭教育にある」と言われている。この言葉の背景には、人間としての礼儀作法や生き方が、親の日々の育て方に大きく依拠していることを指している。つまり、教育とは学校教育を指すだけではなく、親（保護者）が子どもの将来に対して示す意思表明の場でもある。「お受験」という言葉があるが、子どもが実際にその幼稚園や小学校に通いたいと願っているかと言うと、むしろ親が通わせることを希望している場合が多い。子どもにも選ぶ権利はあるだろうが、どのような選択肢を子どもに提示するかについては、圧倒的に親に委ねられている。

学校法人天理大学では、「信条教育」という語を用いて子弟子女に対する宗教教育を表現している。[1] とりわけ、天理教の管内諸学校で勉強した人や、子弟子女を学ばせた人は、そう聞かれたことがあるのではないだろうか。天理教の教え（信条）に根差した普通教育を行うのが、信条教育であると考えられている。天理教の管内諸学校では、教育基本法に基づいた教育を園児・生徒・学生に行ってきた。とりわけ天理大学では、「『陽気ぐらし』世界建設に寄与する人材の養成」を「建学の精神」に謳っており、宗教性・国際性・貢献性に基づく教育カリキュラムを組んでいる。

したがって、管内諸学校の信条教育は、教科教育の点では管外学校と同じであっても、本質の部分で根本的に異なる。他者への献身を通して、陽気ぐらし世界に寄与する人間に成長してもらいたいという理念の下で、教育体制が敷かれているからである。

子どもにも学びたい学校を選択する自由はある。筆者は 2022 年度から天理教の宗教教育についての調査研究を開始し、管内諸学校で勤める先生方にインタビューを重ねてきたが、調査を通して、親が「どのような人間に育ってほしいか」という視点から、子どもへの教育に関わることがいかに重要であるのかを痛感している。

イスラームでは宗教教育はいつから始まるか

イスラームでは男子であれば精通が、女子であれば生理が来るなどの身体的成長を境として、信仰的義務が課されていくことが多い。したがって、何歳からという明確な決まりが設けられているわけではない。

たとえば、2023 年の断食（ラマダーン）月は、3 月 22 日から 4 月 21 日までであった。我が子が断食に挑戦するかどうかの判断は、親が子どもの様子を見ながら促していることが多いようである。30 日間の断食月のうち、今年は 5 日間、来年は 15 日間など、少しずつ挑戦するように我が子に勧めている。就学前の児童であれば、1 日中断食することは難しい。しかしながら、断食していない子どもたちも、日没後に食べる断食明けの食事（イフタール）を通して、親や兄弟姉妹と一緒に特別な雰囲気を味わっている。信仰的実践を通して、どちらかと言えば、厳しさというよりは信仰的楽しさを共有しているという印象を受ける。

そうした理由から、ラマダーンが特別な 1 カ月であり、とにかく「楽しい」という印象が子どもたちには先行する。断食している親であれば、断食明けにおいしい食事を食べたいと思うので普段よりも豪華な食事を作り、食事後は空腹も満たされたので親戚宅や友人宅へ出かけたりする。すると、子どもたちも普段とは違って、断食月にはご馳走を食べ、夜に外出したり、ラマダーン用のお菓子をもらえたりする。古今東西、嫁姑の問題も含めて人間関係は複雑であるため、親は会いたくない親戚宅を訪問しなければならなかったりするが、子どもには楽しいのである。

断食明けの食事に参加する子ども
（2012 年　筆者撮影）

また、ラマダーン月では貧者への施しが推奨されるのもイスラームの特徴である。こうした宗教的紐帯や横のつながりは、拡大家族や親戚付き合いも、年中行事として行っていた半世紀前の日本であれば見られた光景でもある。断食月を子どもの目線から見れば、子どもたちに親の信仰を間近に見る状況を作り出すと同時に、子どもたちを開放的で祝祭的な状況に置かせている。

教えを学ぶ場

3 月号では、クルアーンを全て暗記しているセネガルの友人 A を紹介した。彼は大学と大学院で経済学を専攻していたことを考えると、普通教育を施す学校で学びつつ、クルアーン学校に通っていたということになる。クルアーンをすべて記憶したことは、彼の努力の賜物である。しかし、ここでは、クルアーン学校という教育システムが作りあげられていること、その学校に我が子を通わせる親が存在することに注目したい。

いわゆる「宗教二世」（筆者は、多くの誤解を招くこの言葉を使用することに反対である）が宗教への否定的話題となっている昨今、「やり過ぎだ」という声もあるかもしれない。しかし、学校に通わせるには月謝を支払う必要があり、また学校に通った生徒全員がクルアーンを記憶できるわけではない。それらを踏まえると、粘り強く我が子を通わせた A の両親と、努力して記憶した A がいるだけである。

セネガルのクルアーン学校では、子どもたちが木板と炭のかけらを使ってクルアーンを覚えていた。使用後は木板を洗って天日で乾燥させ、次回の授業で使用する。教師が朗誦するアラビア語のクルアーンを聞いては書き写し、少しずつ覚えていく。子どもたちにとっては、アラビア語は日常生活で用いる言葉ではないため、五感を通してクルアーンを学んでいくのである。

クルアーン学校で用いている木板。水で濡れているため茶色になっている。
（2019 年　筆者撮影）

子育てを含む広い意味で「教育」という語を捉えると、我が子がどのような人間に育ってほしいかという問題は、どのような機会や選択肢を子どもに与えていくかという問題と同一である。そう考えると、信条教育について問われているのは、子ではなく親の信仰姿勢なのかもしれない。

［註］

（1）信条教育が始まった経緯については、拙稿「信条教育とその意義―天理教の宗教教育の成立と展開」『おやさと研究所年報』（29 号）、2022 年、47 ～ 64 頁。